

## 第17回 大学図書館特別展示 ～源氏物語千年紀～ 源氏物語と王朝文学

2008年11月13日に大学図書館ホールで、第17回大学図書館学術資料講演会を開催し、高木和子文学部教授に「男読み源氏物語―光源氏の生涯を読む―」と題してご講演いただいた。またそれに関連して2008年10月31日から11月28日まで西宮上ヶ原キャンパス大学図書館において、大学図書館特別展示「～源氏物語千年紀～源氏物語と王朝文学」を行い、図書館所蔵の『源氏物語（絵入源氏物語）』『源氏小鏡』『源氏物語玉の小櫛』『宇津保物語』『さぬき日記』などの展示を行った。

### 源氏物語概説 高木和子『男読み源氏物語』より

#### ❀「紫式部」について

『源氏物語』は、十一世紀初頭に成立した物語で、作者は紫式部であるとされている。

紫式部は、天延元（九七三）年ごろ、中流貴族の藤原為時の娘として生まれた。本名は定かではなく、「紫式部」という呼び名は『源氏物語』の女主人公「紫の上」に由来するといわれている。

『紫式部日記』によれば、少女の頃の紫式部は、兄弟の惟規が漢文の書物を勉強するのを傍らで耳にしても格段に理解が早かったので、父の為時は、紫式部が男でなかった事を嘆いたという。

紫式部は晩婚で、長保元（九九九）年ごろ、二十歳ほど年上の藤原宣孝と結婚し、娘の大式三位をもうけたが、二年余りの短い結婚生活ののち夫と死別した。その後、『源氏物語』を書き始め、その評判を耳にした時の権力者の藤原道長によって、寛弘二（一〇〇五）年ごろ、娘の彰子の女房として招かれたと想定されている。

藤原道長は、一条天皇の後宮に入った娘の彰子のものと、紫式部や和泉式部や赤染衛門ら、多くの才能のある女房たちを集めた。道長は娘彰子の魅力を高めるために、その文化的な水準を押し上げようとしたのだろう。紫式部は彰子に、『白氏文集』などの漢文の書物を教える家庭教師の役割をも果たしており、『源氏物語』の執筆も仕事の一貫であったとも考えられる。

『源氏物語』の作られた平安時代中期においては、物語は女や子供の楽しむもので、大人の男性が本気に関わるものではなかった。物語の文章は、時には絵とともに楽しまれており、いわば今日の漫画に近いもの

であった。その中で『源氏物語』は当時の帝であった一条天皇にも愛され、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ」と、紫式部は歴史書にまで精通していると誉め讃えられたことから、「日本紀の御局」とあだ名されたという。なるほど『源氏物語』には、日本の歴史や中国の故事が多く踏まえられており、漢文の教養は男性のもの、という当時の常識を大きく打ち破るものであった。ただし、紫式部自身にはこの評価は気恥ずかしく感じられたようである。

寛弘五（一〇〇八）年、彰子は一条天皇の皇子、敦成親王を出産した。のちに後一条天皇となる、道長悲願の孫の皇子の誕生だった。この皇子の誕生五十日の祝宴の折に、藤原公任は「このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」と、紫式部に声をかけたという。『源氏物語』の登場人物、紫の上を思わせる呼び名であり、この時点で『源氏物語』の一部がすでに世間に広まっていたことがわかる。

『紫式部日記』には、彰子周辺で物語を書き写したり綴じたりして整理している様子が描かれている。手直しの行き届いた原稿を道長に持って行かれてしまい、不本意な草稿の方が世に出回ってしまったことなど、物語の制作の過程が想像できる興味深い逸話も記されている。

紫式部の没年については、明らかになっていない。

#### ❀『源氏物語』について

『源氏物語』は、数年以上の時をかけて、徐々に作られていったと考えられており、その成立がいつであるかは定かではない。執筆の順序についても、最初に書かれた巻としては、桐壺巻、帚木巻、若紫巻など、複数の巻が想定されており、結論は出ていない。



特別展示：図書館エントランスホール



特別展示：図書館貴重図書室

物語のすべてが紫式部の作ではなく、一部は別人の作だという説もある。その真偽は定かではないが、いずれにせよ、紫式部が書いた原本そのものは全く残っていない。一般に古代の物語は、写し書かれる過程で複数の人々によって、大なり小なり手を加えられるものであった。平安時代に書写された写本すら発見されていない現在、紫式部が書いた『源氏物語』の原型の復元は、まず不可能に近いのが現状である。

『源氏物語』は、主人公たちの生活を見聞きした作中世界の中にいる女房が、「語り手」となって語って聞かせる、という文体で書かれている。当時の物語が、絵を見ている姫君に女房が語って聞かせるものだったからだ、ともいわれるが、実際にはもちろん音読だけでなく、独りで黙読したり、書き写したりしても楽しまれていた。

作中世界は、『源氏物語』の成立時より数十年さかのぼった延喜・天曆あたりの時代に設定されているともされており、一種の時代小説的な性格を持っている。しかし、もちろん歴史的事実を踏まえるとはいえ、『源氏物語』はあくまで独自のフィクションの世界だった。また、ストーリー展開の方法などを、『竹取物語』や『伊勢物語』など当時の人々によく知られていた物語から取り入れている。

作中には七九五首の和歌が含まれ、地の文に古歌の一節を引用する「引歌」の技法が用いられている。作中人物の対話や心中の思いなどを、巧みな表現で描いており、人の内面を掘り下げたものとなっている。

全五十四巻は、一般に、三部に分けて理解されている。

- 第一部 桐壺巻～藤裏葉巻（三十三巻）  
光源氏の栄華への軌跡の物語
- 第二部 若菜上巻～幻巻（八巻）  
光源氏の晩年の憂愁の物語
- 第三部 匂兵部卿巻～夢浮橋巻（十三巻）  
光源氏死後の、薫や匂宮の物語

第三部、最後の十巻（橋姫巻～夢浮橋巻）を特に、「宇治十帖」という。

のちの時代への影響についても触れておこう。『更級日記』の作者が愛読したように、『源氏物語』は成立当時から人気を博した。また、後代の物語・美術・謡曲などにも大きな影響を与えた。二千年札で知られる国宝「源氏物語絵巻」は平安末の作で、物語のすぐれた解釈を含んだものとして高く評価されている。また、和歌のお手本とされたことから古くから研究の伝統があり、なかでも江戸時代の国文学者本居宣長が『源氏物語玉の小櫛』で、「もののあはれ」と評したことは有名である。

明治以降、与謝野晶子・谷崎潤一郎・円地文子・瀬戸内寂聴などの作家の現代語訳が次々に生み出された。田辺聖子の抄訳、光源氏の告白の文体の橋本治の『寮変源氏物語』、大和和紀の漫画『あさきゆめみし』なども親しまれている。そのほか、アーサー・ウェリーやE・G・サイデンステッカー、ロイヤル・タイラーの英訳のほか、独・仏・韓・中国語訳などがあり、世界的にも紹介されている。



学術資料講演会チラシ